

森田ゆりさんが講演します

総会は5月25日・ウィルあいち

CAPNAの2002年度総会は、5月25日(土)午後1時から、名古屋市東区のウィルあいちにて開催します。今回は、日本のCAP運動の草分けとして知られる森田ゆりさん(エンパワメント・センター主宰・兵庫県在住)、児童虐待防止法の見直しについて積極的に発言されている大阪弁護士会の峯本耕治さんのお二人に記念講演をお願いしました。

児童虐待防止法の改正に向けて議論が高まる中、最先端のお話をうかがえることと思います。

会員の方々は総会・記念講演会ともに入場無料、予約も不要です。ご入場の際に会員証をお示しください。また、一般の方々は講演会(1時30分開始予定)の入場料2000円です。お問い合わせはCAPNA事務局=TEL052(232)2880=へどうぞ。

ご寄付ありがとうございました

CAPNAでは本年度、以下の皆様からご寄付をいただきました。心よりお礼を申し上げます。子どもの虐待防止運動のために役立てさせていただきます。

【団体】=順不同

愛知民間保育協議会、熱田青年の家ヤングフェスティバル実行委員会、春日井ライオンズクラブ、国際ソロプチミスト名古屋、青年の心を育てる会名古屋、名古屋IIソングクラブ、名古屋南ロータリークラブ、青森社会福祉士会、名古屋キリスト教女子青年会、西春日井ロータリークラブ

【個人】=順不同、敬称略

鈴木美哉子 矢満田篤二 萬屋育子 服部恵子 稲生みち子 土屋美恵子 柴田千鶴子 彦坂将大 大杉哲代 井上薫 上野美子 平野利依 近藤真奈美 奥村敬軌 内河恵一 曾根富美子 山田裕子 小山幸世 大竹文子 石川のり子 稲子宣子 吉田由美 市村五月 長谷賢一 岩城正光 白石淑江 ほか匿名の15人の皆様。

キャプナ★ニュースレター

僕は僕やから
大切にできる
僕は僕やから
がんばれる
僕は僕やから
好きになれる

これは石川県立錦城養護学校の生徒だった、原田大助くんの詩です。大助くんは、山元加津子先生との出会いによって、上のような心に響く、素敵な詩をたくさん作りました。

うまくいかなくて落ち込んだり、自己嫌悪に陥ったりしたとき、私はこの詩をじっと見つめます。すると、「そう、私は私でいいんだ。もうちょっとがんばってみようかな」と元気が出てくるのです。

相談室の電話の向こうから、大切にされてこなかった利用者のつらい思いが伝わってくる場合があります。そんな時、私はこの詩を贈りたいと、切に思います。

電話スタッフ 平川 幸子

Vol. 22

CAPNAニュースレター22号 (隔月刊5号)

2002年3月25日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

ホームページ <http://www2.ocn.ne.jp/~capna/>

米国NPOに学ぶ虐待防止・加害者支援

虐待問題が深刻なアメリカでは、その防止や被害者・加害者の救済に、多くのNPOが活動しています。この冬、CAPNAは西海岸と東海岸で活動するNPOの関係者をそれぞれ名古屋にお招きして、勉強会や講演会を主催し、米国の虐待防止活動とのつながりを深めました。以下、紹介します。

Amity講演会

(2月11日・中電ホール)

Amityは、服役中の犯罪加害者、アルコール・薬物の乱用者などのために、米国アリゾナ州・カリフォルニア州などで心のケアの活動をしています。来日したのは、理事ナヤ・アービターさん、事務局長のペティ・フレイズマンさんの2人です。

米国の研究によれば、犯罪加害者の多くは虐待やレイプの体験を持ち、自分を大切にすることをうまく育てることができないまま、力を誇示したり、他人を抑圧したり、アルコール・薬物におぼれていきます。

ナヤさん自身、虐待、家出、レイプ、麻薬の運び屋、服役…と、暗黒の人生を経てきました。ペティさんも、性的虐待や自殺未遂などの経験を持っています。そして、アリゾナ州内の社会復帰施設で自分の人生を見つめ直し、仲間とともに、20年前にAmityを設立しました。

現在、Amityは約20万平方メートルの共同生活拠点を持ち、刑務所を出てきた人などの社会復帰を支援しています。また、刑務所内での心の治療、アルコール・薬物依存症者の回復支援などの活動をしています。Amityの活動に参加した犯罪者は、それ以外の犯罪者に比べて再犯率が著しく低く、再犯防止のうえで大きな成果を挙げています。

名古屋での講演会では、Amityの心理療法の風景もビデオで紹介されました。

10人足らずの小グループで車座になり、自分の体験を語り始めます。男性の犯罪者の中で、子ども時代に性的虐待の被害を受けた人が多いことに驚かされます。男女一緒に体験を語り合うのも、Amityの特徴です。たとえば女性だけの集団で心の傷を癒そうとすると、男性不信につながる恐れがあるのだそうです。

ビデオの中では「こんな場にいたくない。もう嫌だ」と怒り出す巨体の黒人男性がクローズアップになります。性的虐待の被害者の体験を聞き、自らの加害体験を思い出し、罪悪感にかられた人でした。愛する

弟を虐待してしまったという女性は「私のしたことを、弟は許すと言ってくれている。でも、弟が酒や麻薬におぼれてしまったのは私の責任だ」と涙を流しました。

場をリードするスタッフの力量がとても重要な意味を持ちます。加害者、被害者の双方が隠していた体験を語る中で、強烈な否認、怒りなどの感情で不安定になる人も出てきます。スタッフが信頼されていなければ、大混乱になりかねません。



スタッフ自身、服役歴を持っている人がほとんど。心の傷をいやし「過去のつらい体験が今の自分を助けている」と前向きに考えられるようになった人たちだそうです。

犯罪者が背負っているPTSDの問題は、本人も整理できていない場合がありますし、社会の理解もまだまだ進んでいません。Amityでは「ラージストーリー」という言葉を使い、それぞれの物語を理解する手がかりにしています。

たとえば「四歳の時に自分の親が他人を焼き殺す場面を目撃し、大きくなって自分自身も殺人を犯した男の子はどんなラージストーリーを背負っているでしょうか」

「レイプされ、売春を強要され、薬漬けになった女性は、どんなラージストーリーを持っているでしょうか」

自分の物語を理解し、整理することによって、犯罪を繰り返してきた人たちが「もうこんなことはやめよう」と思えるようになるそうです。

暴力に暴力で対抗したり、罰したりするだけでは、暴力の連鎖を断つことはできない。Amityの思想を深く心に刻んだシンボリズムでした。

奥田かおりさん学習会

(1月18日・CAPNA)

ニューヨークの虐待防止NPO「グラハムウインガム」でケースワーカーとして働いている奥田かおりさんが、日本に里帰りされたのを機に、CAPNAにお招きして、現地のお話をうかがいました。

* * *

グラハムウインガムは、20のプログラムを運営しており、年間事業費40億円という巨大NPOです。フォスターケア(里親)の実践、精神的な問題をかかえる子どもたちの入所施設の運営などさまざまな活動があります。奥田さんが所属するプログラムはニューヨーク市のハーレム地区の貧困家庭への支援です。

同市では虐待の通報を受けると、児童相談所にあたる機関のワーカーが72時間以内に家庭に介入して、どんなことが行われたかを確認します。そこで里親が必要か、家庭支援で解決できるかどうかを判断します。

現在、ニューヨーク市では28000人の子どもたちが里親家庭で過ごし、奥田さんの仕事は「里親家庭に行く子を食い止めること」。

このような家族支援プログラムは、市内に150ほどあり、それぞれ地域ごとに担当割りしているそうです。奥田さんのプログラムの場合、事業費が年間5000万円、スタッフは10人。

うち8人がケースプランナーで、その仕事を監督するスーパーバイザー、ケースプランナーとサポートするファミリープランナーがいます。1人のケースプランナーは15家族の面倒をみることになっています。これは市との契約で決められており、それを超えるといいケアができなくなると考えています。

事業費40億円の大半は、市からの補助金。ほかに、カウンセリングなどの事業費が6000万円、寄付が9000万円ほどあります。寄付はアメリカの文化として定着しており、シティバンク、トイザラスなどの大企業からまとまった額の寄付を受けています。ただ、昨秋の世界貿易センター事件以来、世の中の関心がテロ事件に移り、寄付の集まりが悪くなっているそうです。

アルコール・薬物問題、ホームレス、人種、貧困問題など、アメリカは深刻な病理をかかえています。しかし、NPOが高い専門性と組織力を持ち、行政や企業とも連携しながら社会をどっしりと支えていることを感じました。